

研究1「ネットワーク型研究」の報告

青木健太(大阪大学大学院文学研究科博士後期課程院生・RA)

ここでは研究1「ネットワーク型研究」について報告する。「ネットワーク型研究」は3つの地域で展開されている。まず各地域について報告し、後にこれらの全体を見渡したうえで今後の活動を提示する。

A. 各地域での活動の報告

以下に研究1「ネットワーク型研究」の活動を、神戸、岡山、大阪と地域別に分類して報告する。

I. 神戸

まず神戸での活動を報告する。神戸では、「患者のウェル・リビングを考える会」の要請に答えるかたちで共同研究を行った。

患者のウェル・リビングを考える会代表の藤本啓子氏は、患者みずからが考えること、そして患者の考えが家族と共有されることの重要性を訴えている。ここでいう「家族」とは必ずしも血縁関係を前提にしておらず、「患者にとって身近で親しみのある人」という意味である。

「患者のウェル・リビングを考える会」の趣旨について、HPでは次のように述べられている。「だれでも病気にかかるより、健康な生活を送りたいものです。しかし、死や病は突然やってくるかもしれません。どのような病気にかかるのか、どのような死を迎えるのかは予測不可能です。そこで、日ごろから、自分の望む治療や死のあり方について考えておきたいものです。病や死を通して、人間の尊厳とは何か、安楽とは何か、最良の判断とはどのようなものなのか、患者や家族の意思はどうあるかなど、みんなで考える会です。」(患者のウェル・リビングを考える会：http://www.geocities.jp/well_living_cafe/about.html) 以下に報告する二つの活動も、このような趣旨のもとで行われている。

1. リビングウィルの編集

協力した活動の一つは「患者のウェル・リビングを考える会」作成のリビングウィルの編集作業である。同会は2009年から独自のリビングウィルの編集に着手し、2011年に『大

切なあなたに「伝えておきたいこと」 『ファミリー・リビングウィル』をすでに完成させていた。このリビングウィルをさらにブラッシュアップした第二版を編集すべく、実社会対応プログラムの研究の一環として協力することとなった。

a) リビングウィル作成会

編集会議は、並行して行われたリビングウィル作成会で浮上した改善点をもとに行われた。実社会対応プログラムとして関わったのは編集会議であるが、作成会にも阪大側から浜渦、山口、青木が参加している。作成会は、リビングウィルにある項目のうち4つを毎月一回一つずつ扱うという形式で、2014年1月から4月に一期目、6月から9月に二期目が行われた。この作成会では、「患者のウェル・リビングを考える会」がすでに編集していた『ファミリー・リビングウィル』の旧版が用いられた。参加者は一般市民で、各回のテーマについてのレクチャーを行った後に実際にリビングウィルに自分の考えを記入してもらった。なお7月12日には「日本ホスピス・在宅ケア研究会」でも作成会が開催されており、多くの医療関係者が参加した。また、作成会という形式ではないが、9月6日に清水八千代氏が主催する「仙台哲学サロン」に藤本氏と青木が参加し、一般市民にリビングウィルを紹介した。この際、東京大学の清水哲郎氏と意見交換を行っている。

リビングウィル作成会は神戸のほかにも岡山でも展開された。つづいて報告する「〈ケア〉を考える会」主催のシンポジウムで藤本氏が発表したことを契機に、まず10月5日の「〈ケア〉を考える会」で作成会が行われた。その翌日より神戸で行われたものを踏襲した作成会が行われた。これについては岡山の活動報告で詳しく言及する。

b) 編集作業

編集は、上述の作成会のなかで参加者から聞かれた疑問点や、参加者の記入した内容などを踏まえて行われた。上述のように阪大側の3名も作成会に参加していたので、実際に一般市民がどのようにリビングウィルを理解しているかを把握したうえで編集会議に臨んでいる。編集会議は合計10回行われている。編集会議が単独で開かれたのは、作成会の第一期の終了後にあたる5月17日と、第二期の終了後にあたる10月18日の2回である。各作成会の終了後に計8回の編集会議が行われており、その回のテーマを中心として書式の検討がなされた。

編集の際、注意が払われたことは、作成のために必要な情報が作成者の意思を一定方向に誘導していないかということである。「死が間近である」ということが強調されがちだった第一版では、選択の余地がないように見えてしまい、「治療を望まない」「治療を中止する」という選択をするほかにないかのように参加者が想定しがちであった。また、リビングウィルを書こうとする参加者がもともと「延命治療の中止」ということを強く望んでいる

場合が多く、それ以前までのプロセスの中での選択に注目できていないこともあった。このことを考慮して、「選択する」ということを作成者がしっかりと意識したうえで記入ができるような構成への変更が行われた。

また、参加者の中には自分の考えは明確でも、それを家族や身近な人と共有できていない人が多かった。患者が自分の意思を固めているだけでは、患者による一方的な宣言にしかない。「患者のウェル・リビングを考える会」の趣旨が家族の意思にふれているのは、この点を考慮しているからである。『ファミリー・リビングウィル』でも旧版のときから家族との対話の重要性は訴えられており、これについては新版でも継承された。

形式面では、文章による説明から図やフローチャートによる説明への変更が全体をとおして行われた。これは高齢者がリビングウィルを書く際、文章を読むことを負担に感じていたことが理由である。長文による説明書きは、それだけで高齢者がリビングウィルを書く際の壁となってしまふ。全体をとおして、可能な限り文章による説明を排する編集を行った。また、文章で説明されていたものを箇条書きにしてポイントを明確化することで、何を念頭に置かなければならないかが伝わりやすくなる効果も得られた。

その他、第一版が完成した 2011 年以後に変更された制度や医療現場の対応を踏まえた加筆修正がなされた。また、第一版ではリビングウィルの本体と解説が一冊組みになっていたが、リビングウィルの作成時に参照しやすいように解説を独立させて一冊の冊子とした。

c) 編集会議の成果

上述の編集を経て、2014 年 10 月に『ファミリー・リビングウィル 大切なあなたに伝えておきたいこと』が第二版としてリビングウィル本体と解説編の二冊組で完成した。

2. がん相談ガイドブックの編集

リビングウィルの編集と並行して協力したのが、がん相談ガイドブックの編集である。こちらもすでに『がんと診断されたら がんと向き合うためのノート』を「患者のウェル・リビングを考える会」が発行しており、このガイドブックの再検討というかたちでの協力となった。

a) 編集会議

がん相談ガイドブックの編集に際しては、リビングウィルの編集のように並行して作成会などは行われていない。しかし、リビングウィル作成会ではがんについて扱った回があり、そこで得られた市民の意見が参考にされた。また、2015 年の 1 月 17 日に勉強会を開

催し、松川絵里氏によるがん患者の闘病記の紹介や森本医師のレクチャーを受けた。編集会議は2014年の6月28日、8月2日、12月13日、2015年の1月17日の勉強会後に行われた。

編集の際にもっとも複雑な議論が必要となり、多くの時間が費やされたのは、保険制度の記述である。介護保険と医療保険のどちらが適用されるのか、適用された場合に患者が負担する金額はどの程度かといったことが、患者の状況によって異なるためである。また制度自体も非常に複雑な構造をもっている。すべてのケースに対応しようとすることは不可能であるため、目安として一般的なケースをもとにしたモデルを提示する方向で落ち着いた。この点についての検討をとおして現行の保険制度の複雑さが露わになったことは、ひとつの収穫であった。

他にインフォームド・コンセントの記述について、患者が医療者にインフォームド・コンセントを「与える」とするか「伝える」とするか、ということが議論された。第一版では「与える」と記述されており、この記述が医師に対抗する意味合いが強いということから「伝える」に変更するという案が出された。しかし、インフォームド・コンセントの主体は患者であることや、「患者のウェル・リビングを考える会」の趣旨を考慮して従来の「与える」という記述が維持された。このような記述の仕方についての検討が全体をとおして行われ、一般市民に馴染みの薄い言葉遣いは修正されるか説明が加えられた。

c) 編集会議の成果

上述の編集会議を経てがん相談ガイドブックの第二版が完成した。

3. 神戸での今後の活動

上の報告のうち、リビングウィル関連の活動が現在も継続中である。4月4日には第1回リビングウィル勉強会が開催されており、6月20日には人工透析の専門医を招いて第2回が開催される。また9月3日にはがんについて扱う第3回が予定されている。今回のシリーズは作成会という形式をとっていないが、専門家によるレクチャーを中心にリビングウィルを書くための情報提供を市民に向けて行うという意義がある。

患者のウェル・リビングを考える会との連携では、8月1日に「エンディングノート&リビングウィルノート」(仮題)と題して大分で交流会を行う予定がある。すでに岡山では本格的に作成会を行ったが、今後他の地域でもリビングウィルについての活動が展開される可能性があるだろう。

Ⅱ. 岡山

1. <ケア>を考える会-岡山

「<ケア>を考える会-岡山」(HP : <http://okayama-care.jimdo.com>) はかねてよりシンポジウムの共催という仕方で交流があったが、シンポジウムは大阪での開催であるため岡山での同会の活動には加わることができていなかった。そこで、実社会対応プログラムの開始を機に同会の岡山での活動にも参加し、より連携を強めることにした。

<ケア>を考える会-岡山は2013年6月に始まり現在までに17回開催されている。実社会対応プログラムの活動としては第8回からの各回に参加し、シンポジウムや発表、ディスカッションへの参加および記録といったかたちで交流してきた。とくに第9回として開催されたシンポジウムは岡山で活動する「岡山高齢者・障がい者権利擁護ネットワーク懇談会」の関心を引き、リビングウィルについて大きな関心を引き寄せることになった。その後、神戸の「患者のウェル・リビングを考える会」のリビングウィル作成会を紹介したことをきっかけに、岡山でも後述のようなリビングウィル作成会が開催されるにいたっている。

a) 参加者の特徴

<ケア>を考える会には、看護、介護、社会福祉、作業療法、成年後見、法律、教育など様々な背景をもつ人々がそれぞれの経験を語り、また様々な背景から対話している。専門領域をまたいでおのおのの経験について対話するという実践として、重要な意義をもつ集まりであると言えるだろう。また、専門家だけでなく、集まっている専門家のケアの対象となる患者や一般市民も参加している。さらには、専門家であると同時にケアを受ける対象でもあるという参加者もいる。発表者が提供した多様な話題について、様々な立場から常に立体的に考えることのできる体制をととのえている。

b) <ケア>を考える会第8回以降のテーマ

開催日：2014年5月25日（第8回）

テーマ：高齢慢性腎臓病患者さんの豊かないのちの実現のために—透析見合わせを希望した高齢者の事例発表—

発表者：大賀由花（公益法人赤磐医師会病院／透析療法指導看護師）

開催日：2014年6月14日（第9回）

テーマ：シンポジウム「事前指示」「リビングウィル」とは？—人生の最終段階を考える—

- 1) 「リビングウィルプロジェクト～作成会の試み～」
発表者：藤本啓子（患者のウェル・リビングを考える会代表）
- 2) 「事前指示や意思決定支援～ヨーロッパでは～」
発表者：浜渦辰二（大阪大学教授、「ケアの臨床哲学」研究会代表）
- 3) 「成年後見制度の課題などについて」
発表者：竹内俊一（弁護士、岡山高齢者・障がい者権利擁護ネットワーク懇談会代表）
- 4) 意見交換：「人生の最終段階を考える」
ファシリテーター：松川絵里（大阪大学 CSCD 特任研究員／カフェフィロ代表）

開催日：2014年7月13日（第10回）

テーマ：ぼくを鍛えた「じじばば」たち—私の〈ケア〉の原点

発表者：林道也（介護支援専門員・社会福祉士）

開催日：2014年8月24日（第11回）

テーマ：「寄り添い」の障害者支援～ともに歳を重ねてきた障害者たち～

発表者：河合清志（社会福祉士）

開催日：2014年10月5日（第12回）

テーマ：「リビングウィル」（事前指示書）とはなにか？

発表者：藤本啓子（「患者のウェル・リビングを考える会」代表）

開催日：2014年11月9日（第13回）

テーマ：障害受容と芸術—障害受容からの解放—

発表者：田中順子（川崎医療福祉大学リハビリテーション学科准教授／作業療法士）

開催日：2014年12月23日（第14回）

テーマ：被害者救済と福祉—被害者の立場から—

発表者：平松邦夫（社会福祉士、森永ひ素ミルク中毒の被害者）

開催日：2015年2月11日（第15回）

テーマ：患者をめぐる“決定”を考える～ソーシャルワーカーとしての経験から～

発表者：竹中麻由美（川崎医療福祉大学医療福祉学部准教授）

開催日：2015年4月12日（第16回）

テーマ：治療に関する意思決定の難しさ～患者の立場から～

発表者：松川絵里（大阪大学 CSCD 特任研究員／カフェフィロ代表）

開催日：2015年5月17日（第17回）

テーマ：死について考えることのできる場所～絵本をとおした対話から～

発表者：青木健太（大阪大学文学研究科博士後期課程）

2. 岡山リビングウィル作成会

岡山高齢者・障がい者権利擁護ネットワーク懇談会代表の竹内氏から、神戸で行われているリビングウィル作成会の岡山での開催について要望があり、作成会を準備することとなった。作成会の企画にあたっては藤本氏の協力をえることができた。使用したリビングウィルも患者のウェル・リビングを考える会が編集したもの（※改定前）である。岡山高齢者・障がい者権利擁護ネットワーク懇談会が開催されている時間中、同じ会場の一画で開催した。作成会の運営には、研究協力者の松川氏、林氏、そして青木が携わった。

a) 岡山のリビングウィル作成会の特徴

岡山のリビングウィル作成会の特徴としては、少人数制であることと、第2回と第4回の事前レクチャーを医療関係の専門家に依頼したことが挙げられる。透析についてのレクチャーの際には、実際に血液透析や腹膜透析で使う医療器具を用いた具体的な説明がされた。第4回についても、嚥下の仕組みや病状に応じた食事の提供について写真や図を用いながら情報提供がされた。このような具体的な説明に加え、少人数であるがゆえに参加者が講師と直接話す機会をつくることもできた。これらのことから、不確かな知識をもったままリビングウィルの作成や参加者同士での対話を行うことを防ぐことができた。

b) リビングウィル作成会全4回のテーマ

開催日：2014年11月1日（第1回）

テーマ：リビングウィルとは？

事前レクチャー：松川絵里（大阪大学 CSCD 特任研究員／カフェフィロ代表）

開催日：2014年12月6日（第2回）

テーマ：人工透析が必要になったら？

事前レクチャー：大脇浩香（岡山済生会総合病院透析看護認定看護師）

開催日：2015年1月10日（第3回）

テーマ：脳死状態になったら？

事前レクチャー：青木健太（大阪大学大学院文学研究科博士後期課程・臨床哲学）

開催日：2015年2月7日（第4回）

テーマ：口から食べられなくなったら？

事前レクチャー：清水昭雄（しげい病院管理栄養士、日本リハビリテーション栄養研究会）

3. 岡山での今後の活動

多種多様な専門領域や立場の人々が参加する場をつくっている〈ケア〉を考える会は、それ自体注目すべき活動である。実社会対応プログラムの関係では、空堀がケアに関わる人々（各分野の専門家や一般市民）の交流の深化を試みようとしているところである。この試みにとって岡山の活動は具体的な将来像としてひとつの参考になるだろう。

リビングウィル作成会については、岡山高齢者・障がい者権利擁護ネットワーク懇談会の勉強会での作成会を今夏実施する予定である。作成会そのものについて、上述のように岡山は実施の方法が神戸のそれとは異なる点があるが、それだけでなく実施の背景も異なっている。作成会の実施に至る経緯にある通り、岡山でのリビングウィルへの関心は弁護士や成年後見人が寄せる関心である。つまり、「身寄りのない人の支援」を問題意識として持っている中で、リビングウィルに意義を見出しているのである。これは神戸の患者のウェル・リビングを考える会とは異なる関心からのリビングウィルへのアプローチである。そのため、岡山でのリビングウィルについての活動を継続することで、リビングウィルなし、さらに一般的に意思決定について多角的に研究することができるだろう。

Ⅲ. 大阪

大阪は空堀地区を中心に活動を展開している。活動の拠点となっているのは「からほりさろん」である。「からほりさろん」は、研究協力者である「NPO 法人高齢者外出介助の会」（HP：<http://odekake-karahori.com>）の永井佳子氏が主導するオープンスペースである。道行く人が気軽に立ち寄り、安心して過ごすことのできる場所として開かれている。また、英会話教室やハーモニカ教室といった活動に対するしてスペースを提供もしている。後に報告する食事会のように、単に居場所を提供するだけでなく積極的な支援活動も行っている。「からほりさろん」はその性質上様々な背景をもつ人々が集まるが、なかには問題を抱え助けを求めるように訪れる人もいる。

「からほりさろん」は様々な活動の可能性を見出すことのできる場所であり、実社会対

応プログラムの活動拠点としては理想的な場所であるといえる。すでに以下に報告するような活動を始めており、今後も活動を継続することでさらなる展開が期待される。これらの他にも、活動の可能性を見出しながらまだ手つかずのものがああり、活動の実現が待たれる。

1. 食事アンケート

永井氏が中心となって、高齢者に対する食事状況についてのアンケート調査が行われた。このアンケートは、高齢者に対してどのような食事に関する支援が必要であり、またどのような支援が可能かを把握するために行われた。

「からほりさろん」では毎週木曜日に食事会が行われており、この会に参加する高齢者にもアンケート調査が実施された。青木が、この6月19日の食事会で行われたアンケート調査に協力し、永井氏とともに調査結果にもとづいた高齢者の食事状況についての考察も行った。

a) アンケート調査の背景

このアンケートの問題意識としては、高齢者が空堀に住み続けることの困難がある。永井氏は、高齢者が健康上の問題などで住み慣れた空堀を離れ、親族の暮らす遠方の土地へと移らなければならなくなったケースに多く直面してきている。できることなら住み慣れた場所で最期まで過ごしたいという高齢者の願いがあり、永井氏のもとにはそのような高齢者の声が寄せられている。この願いを実現するために、永井氏は「からほりさろん」の活動をさらに発展させることを目指している。高齢者の食事状況のアンケートもこの問題意識を背景にしたものであり、生きることにしてもっとも基礎的な部分を調べようとするものだった。

b) アンケートの方法と結果

食事会に訪れた高齢者にアンケート調査を行い、得られた回答をもとにどのような問題があるかを分析した。アンケート用紙を配って記入してもらうという方法では難しい場合があるため、一対一のインタビュー形式でアンケートをとった。

調査結果としては一日三食の食事をとっている人が多く、体調がすぐれないときでもなるべく食事をとるようにしているなど、食事についての意識が高いことが見受けられた。現状としては一見問題がないように思われるが、何らかの理由によって自分で食事を用意できない場合については回答が曖昧であった。これは緊急時に対して備えるということへ

の関心が薄いことを表している。今のところ何の問題もないということが、緊急時の対応を考えることを妨げていると思われる。

c) 結果を受けての活動

アンケートの結果は、管理栄養士によるアドバイスや空堀周辺地域での食事サポートの情報などと共にリーフレットとしてまとめられ配布された。

現状でも宅配サービスを行っている商店が空堀にはあり、「からほりさろん」以外でも食事の支援を行っている団体が存在する。しかし、それらと高齢者がつながっておらず、高齢者の側では、そういった支援があることをそもそも認識していない実態があるようだ。この背景には、平常時には食事がとれなくなった場合のことが考えにくいということがあられると思われる。平常時では意識されにくい緊急時での対応について、しっかりとした備えをするように呼びかけることが必要である。

また、「からほりさろん」としてはどのような支援がありうるかも考えられている。たとえば、いまのところ食事会というかたちでの支援はあるが、問題を抱えた高齢者が「からほりさろん」まで来ることができるとは限らない。また、家族が遠方に住んでいる場合、家族による支援が難しい場合もある。このような状況にある高齢者は、緊急時に住み慣れた土地を離れることになるかもしれない。そういった高齢者をできるかぎり早い段階で見つけ出し、支援の可能性を考えることが必要である。「からほりさろん」の食事会はそのような高齢者を見つけることのできる場のひとつであり、場合によってはその高齢者の住まいを訪ね支援することも考えられる。

2. 哲学カフェ

空堀商店街にあるカフェ「道勝 café」で青木が「空堀哲学 café」を月一回のペースで開催している。

a) 開催の背景

空堀地区は住人が減少傾向にあり、商店街を訪れる人も少なくなっている。とくに日曜日は各店舗のシャッターが閉まり、人が集まりにくい。このような状況に対して人々を集めようという意図のもと、2014年1月から「からほり軒先フリーマーケット」というイベントが毎月第4日曜日に開催されている。空堀地区に点在する店舗が各々にフリーマーケットを行う一方で、商店街の中ではシャッターが閉まった店舗の前で雑貨などを販売するフリーマーケットを行い、集客を図っている。このイベントの趣旨に沿い、空堀地区に人々

が集まるきっかけになるものとして哲学カフェを企画したことが、開催の発端である。

b) 参加者の傾向

定員は 10 名としており、ほぼ定員に達する人数が参加するようになってきている。広報を主に web 上で行っている関係で、空堀地区以外からの参加もある。参加者の年齢層は 20 代から 70 代まで多岐にわたる。男女比はテーマによって異なるが、女性の方が多くなることがしばしばある。

c) 形式とテーマ

毎月第 4 日曜日に開催されており、時間は 14 時から 18 時の 2 時間である。最初に進行役の青木がその回のテーマについて簡単に導入となる話をして、参加者との対話を始める。途中 5 分程度の休憩を挟んでいる。2014 年の 10 月に第 1 回目を開催し、現在までに計 8 回開催されている。これまでに扱ったテーマは以下のとおりである。

2014 年 10 月 26 日「運命」

2014 年 11 月 23 日「猫っばいひと／犬っばいひと」

2014 年 12 月 21 日「ほめる／ほめられる」

2015 年 1 月 25 日「信じる」

2015 年 2 月 22 日「あう／あわない」

2015 年 3 月 22 日「あこがれ／嫉妬」

2015 年 4 月 26 日「女子力」

2015 年 5 月 24 日「名前」

d) 今後の展開

前述のとおり、空堀哲学 café には空堀の活性化をはかるという目的がある。しかし、哲学カフェの開催はそのようなことに留まらず、もちろん対話の場をつくるという側面ももつ。いまの空堀哲学 café は、空堀周辺に住む人と他地域に在住する人との対話の場となっている。より一般的に考えて、哲学カフェが市民のあいだで対話が行われる場をつくっているとすれば、ある地域でのコミュニティ形成にも結びついてくるだろう。このような観点からすると、哲学カフェは次に報告する「地域包括ケアシステム」の取り組みに寄与するものとなりうる。この取り組みとの関係も考慮しつつ、哲学カフェを市民の対話の場として盛り上げることが空堀哲学 café を継続する意義である。

3. 地域包括ケアシステム

研究協力者の岩切かおり氏を介して、きむ医療連携クリニックとの共同研究が準備段階に入っている。9月に開催するシンポジウムを皮切りとして、本格的に活動を開始する予定である。

a) 共同研究の背景

きむ医療連携クリニック側からの問題提起の一つは、医療と介護の連携の実現である。2012年に地域包括ケアシステムが提唱され、地域包括支援センターを中心に医療・介護の連携を図る体制づくりが進められることになった。しかし、実態としては現在も医療と介護の溝は深く、在宅医療・介護の推進には結びついていない。原因としては、地域包括支援センターの人員不足、専門職間の言葉の壁などが挙げられる。また、医療と介護のそれぞれが組み込まれている制度が両者の連携を阻害してしまうこともある。この状況を打開することが課題の一つとなる。

もう一つの課題は、地域のなかで問題を抱えて暮らしている人々を見つける仕組みづくりである。潜在的に存在する困難を抱えた人々を見つけ出し、支援をすることができる機関と結びつけるという考え方である。

以上のように課題としては二つのものがあるが、人々のつながりを強め地域としてのケアの力を高めるといふ考え方において共通するといえるだろう。これは「ネットワーク型研究」の考え方に直結するものでもあり、阪大ときむ医療連携クリニックとの連携に際して両者の問題意識はすでに十分共有されているといえる。

b) 哲学の役割

哲学からこの課題に関わる私たちに期待されていることは、人々がお互いについての認識を深め連携するための素地をつくることである。現状では各専門職の間でも、専門職と一般市民の間でも十分なつながりがつくられていない。とりわけ言葉の壁が大きな問題となっているということが現場の実感である。

この状況を踏まえ、私たちが提供するものとして、シンポジウム型のもので哲学カフェ型のものを検討している。シンポジウムでは、複数の領域の専門職や一般市民を集めて情報提供や問題の共有を図る。哲学カフェは、シンポジウムの内容を受けながら言葉の壁をできるかぎり取り払った対話を行うことで、人々がつながるきっかけをつくることを目指す。

c) 連携の現状

夏以降の本格的な活動の開始に向けて、阪大側の関係者がきむ医療連携クリニックを訪ね話し合いの場を設けている。4月27日、5月18日に上述のような問題意識の共有と、それをうけた具体的な連携のあり方が話し合われた。今後も定期的に話し合いの場がもたれる予定である。また、5月24日の空堀哲学 café には、きむ医療連携クリニックの西原医師が参加している。

4. 空堀での今後の活動

上述の活動以外に、「からほりさろん」で子どもの居場所をつくる取り組みが着手されている。「からほりさろん」は高齢者が利用者のほとんどを占めているが、ここに子どもやその母親が来るようになれば世代間のつながりを強めることができる。

具体的な形態のひとつとしては学童保育が検討の対象になっている。しかし、学童保育は人員や場所の規定がありすぐに実現が可能なものではない。また、現行の学童保育が子どもの居場所として理想的形態といえるかも定かではない。この点について、すでに設置されている学童保育を見学し、現状の把握をする計画を進めている。学童保育以外の形態としては、神戸の「グリーングラス」のような母親の対話の場所もモデルとして検討している。「グリーングラス」は神戸市の鈴蘭台で活動する育児サークルで、2004年に松川絵里氏がこのサークルと哲学カフェを始めた。「グリーングラス」は基本的には母親同士が対話する場所ではあるが、子どもも居合わせており、母親が子どもと一緒にいながら話し合う場所をつくるノウハウを蓄積してきている。

すでに一定期間にわたって続けられているこれらの活動から情報を得つつ、空堀の特徴にあわせた子どもの居場所づくりを今後試みる。

一方、「からほりさろん」が抱える問題のうち手つかずになっている課題もある。それは障害の問題である。高齢者の文脈では老いに伴う身体の不自由や——「からほりさろん」を運営しているのはNPO法人高齢者外出介助の会である——認知症などが考えられる。しかし、高齢者に限らず障害をもつ人が「からほりさろん」を訪れており、永井氏によればとくに精神障害をもつ人々がしばしば訪ねてくるようだ。今のところ、この領域については集中的に携わることができていない。地域でのケアは障害者も含めたものとして確立されなければ、完全なものとはいえない。今後、障害の領域についても研究を進める必要があり、この領域に携わる人員の補充と研究活動の展開が不可欠である。

B. 考察—今後の活動と課題

各地域での今後の活動については、それぞれの地域ごとに継続中のものや新たな展開の

可能性を言及した。ここでは研究 1 の活動の全体を視野におさめ、各地域のいずれにおいても共通する私たちの今後の課題について述べておきたい。今後の課題として挙げられることは、「問い」に基づいて人々のネットワーク形成に寄与することである。

現状すでに取り組んでおり、今後もなお継続の必要があることは「ケアのネットワークの形成と維持」である。様々な技術と知識を備えた専門職間における連携、そして一般市民との交流。こうしたことがまだ実現されていないところでは、これからネットワークを形成することが必要である。さらに、ネットワークが形成された後にはこれを維持することを考えなければならない。人々の繋がりが成立したとしても、それが一時的なものであれば継続的なケアは不可能だからである。逆にいえば、ネットワークの形成を考える時点で、それが継続可能なものかどうかを考慮しなければならない。

この観点で私たちが訪れている地域をみると、岡山の「<ケア>を考える会」や大阪の「ケアの臨床哲学研究会」は、シンポジウムや研究会を継続することで現にネットワークの維持を図り、さらに新たな連携が結ばれることを促している。「患者のウェル・リビングを考える会」は、市民向けの勉強会を継続的に開催することで医療における患者と医療従事者との間のアンバランスな関係を改善し、適切な関係を築くことを目指している。空堀では新しいネットワークの形成を目指した動きが始まっている。

ネットワークの形成に対して哲学の文脈から寄与できることは、人々の間に共通の「問い」を見出し共に考えることであろう。人々がそれぞれの立場でそれぞれの課題に取り組むことはそれ自体に問題のあることではないが、結果的にそれぞれの向かう方向が分散し、連携がとりにくい状況になってしまうという側面もある。そのような状況が生まれる中で、それぞれの課題に従事する人々が共有可能な「問い」を提示することでできれば、人々はその「問い」を基準にお互いの立ち位置に確かめ合うことができる。そして、それぞれの課題をもちながらも、全体としては同じ方向に向かっていることを確かめることができる。このような「問い」を提示し共に考えることが、哲学の果たすべき役割である。

実際にこれまで参加してきた各地域での活動から「問い」を立てると、ひとつの「問い」を共有可能なものとして導き出すことができる。それは、「まだ問題として実際に起こっていないことを、それが起こる前に考えるということがいかなることであり、またいかにして可能なのか」という問いである。岡山と神戸がそれぞれの背景をもって取り組んでいるリビングウィル、そして空堀の食事アンケートと地域包括ケアシステム。これらはそのいずれもが、今後起こりうる、あるいは確実に起こることに備えるための取り組みであるという点で共通している。それぞれの地域が取り組んでいる課題を「まだ問題として実際に起こっていないことを、それが起こる前に考えること」として捉えることで、活動全体を見渡す統一的な観点を得ることができるのである。

私たちは、この「問い」をもって各地域の活動に参加し、それぞれの活動の中でこの「問い」を考えることのできる立場にある。したがって、私たちは、「まだ問題として実際に起こっていないことを、それが起こる前に考えるということがいかなることであり、またい

かにして可能なのか」を各地域での取り組みに基づいて多方面から考え、それを総括して全体像をつかみ、明らかになったことを各地域での活動に還元することを課題としてもっていることになる。これまでの活動から得られたこの「問い」にもとづき、人々の間のネットワーク形成に寄与することが今後の私たちの課題としてあげられるだろう。

以上のように、これまでの研究 1 の取り組みにおいてすでに一定の成果を上げているものがあるが、これらの成果は新たな課題を私たちに課している。今後はこの課題へと研究を進める必要がある。

【2015 年 6 月以降の活動】

○大正クムダクリニック見学（2015/7/27）

臨床工学技士の近藤昭彦氏の説明を受けながら、人工透析クリニックの「大正クムダクリニック」を浜渦・青木が見学した。

人工透析は、ベッドの傍に置かれている装置と透析液を製造する大型の装置によって成り立っている。透析液を製造している装置は目につかないところに置かれているが、この装置はクリニックのほぼすべての人工透析器に透析液を供給しており、クリニックの心臓部になっている。極めて高精度のろ過機能をもっており、水道水に薬品を加えて透析液をつくる。在宅での人工透析の場合は、この装置の小型版を使用する。「臨床工学技士」はこれらすべての機器を管理する。

透析のためには腕に「シャント」をつくる必要がある。ふつうは聴診器を当てても血流の音は聞こえないが、シャントでははっきりと血の流れる音を確認することができる。つまり、その程度の血流が確保できている必要がある。

ダイアライザーやチューブは患者との相性がある。ダイアライザーは非常に多くの種類があり、およそ 1 年程度かけて患者にフィットするものを選定する。透析キットに含まれる物質が患者の身体に悪影響を及ぼすこともあり、客観的なデータから機械的にダイアライザーを選定することはできない。透析中に急激な血圧低下をお越してしまうケースもあるため、クリニックのスタッフはたとえわずかな動きであっても、つねに患者の様子に神経を尖らせている。

患者の体調管理については、水分の管理が最も重要なポイントとなる。患者ごとに目標値が決められており、患者がこの目標値より多く水分をとった場合はより長い時間透析を受ける必要がある。透析の時間が長くなれば患者の負担は大きくなるため、患者自身ができるかぎり目標値を守ることが望ましい。このことは患者の食の趣向や生活習慣に関わるため、クリニックによる徹底管理ということは難しい。季節による身体の変化も考慮する必要がある。

また、透析の時間については意図的に短くしているケースがある。患者自身が家族の介

護をしている場合などは、透析に時間がかかり過ぎないようにするという配慮がある。このような処置がとられるかは、クリニックとしてどのような思想をもっているかによるところが大きい。

透析中の患者は必ずしも安定していないため、つねにスタッフは患者の様子を見て回る。これはそれだけ患者との接触の時間が長いことを意味しており、それに伴って患者とのコミュニケーションをとる機会も多くなる。このことはメリットでもあるかもしれないが、場合によっては患者がスタッフに不満をぶつけることもある。

考察

人工透析器は実はベッドの横にある器械だけでは完結しておらず、「バックヤード」に小部屋一つ占領するような大型の機械があり、クリニックにある複数の透析器に透析液を供給しているというのが全体像だった。このことがわかったのは、「臨床工学技士」という専門職からみたクリニックを案内してもらったからだろう。患者のケアと器械の「ケア（＝メンテナンス・修理）」の両方を担っている立場であり、そのために器械の説明も可能だったということだ。

この「臨床工学技士」の「世界」には重要なことが含まれていると考えられる。透析の文脈での臨床工学技士は器械のメンテナンス・修理をしているだけではなく、患者への穿刺もする。医師や看護師も器械を触るが、壊れたところを「ケア」することはできない。臨床工学技士だけが人間と器械のどちらも「ケア」している。

ここから考えられることは、臨床工学技士は「人間」と「器械／機械」の違いを「知って」いる、それも概念としてではなく「手ざわり」で「わかって」いるのではないかということだ。穿刺に伴う痛み、長時間の透析の負荷、食事コントロールの負担。トラブルのある箇所の見極め、継続使用の可否、部品交換のタイミング。一方でどうやって患者の「痛み」をとるかにある意味「命」をかけており、もう一方でクリニックの「コア」である装置の世話役を担う。

臨床工学技士がこの両極を渡り歩いているとすると、そのあいだの「境界」を明らかにする可能性がある、少なくとも「手ざわり」としてはとっくにはっきりしているのかもしれない。ケアの現場における「臨床工学技士」の役割を確かめることで、より重要な視点を獲得することができるだろう。

○大分活動報告（2015/8/1,2）

1.リビングウィル（8/1）

a.研究会

妙瑞寺にて開かれた「NPO法人これからの葬送を考える会九州」主催の「安心してエンディングを実現する環境を学ぶ」に参加した。青木が神戸で開催されたものを中心にリビングウィル作成会について報告、藤本が『ファミリー・リビングウィル 大切なあなたに伝えておきたいこと』を紹介、浜渦が自身の看取りの体験からリビングウィルの必要性について話した。その後、参加者と共に質疑応答、ディスカッションを行った。

「これからの葬送を考える会九州」は独自のエンディング・ノートを編集している。ディスカッションにおいては、『ファミリー・リビングウィル』が最も重視していることの一つである「コミュニケーション」が中心的な話題になった。事前に家族や身近な人とのやりとりをしておくことが、リビングウィルの有効性の鍵になることを伝えた。今後「これからの葬送を考える会九州」で再びリビングウィルないしエンディング・ノートを編集する場合は、『ファミリー・リビングウィル』が重視している点を考慮したいという評価を受けた。

b.墓地の見学

妙瑞寺に開設されている埋葬施設の「安穏廟」と「桜葬」を住職に案内していただきながら見学した。どちらも墓地の新しい形態を提案するものとなっている。

「安穏廟」は盛り土の周りを囲うように、円形に納骨の区画が設けられている。墓標に特徴があり、従来医通り俗名を彫ってある場合もあるが、おのおのに希望した言葉を墓標としているものがほとんどだった。区画自体は契約されているが、墓標として何を選ぶかに迷ってしままだに墓標がないものがあることは、ある意味この「安穏廟」のユニークさを表しているといえるかもしれない。

「桜葬」は九州に初めて開設された「樹木葬」墓地。円形の盛り土が二つつながって瓢箪型になっており、それぞれの盛り土の中心に桜が植えられている。現在はまだ小さな木だが、今後その成長を見ることができるとは一つの「売り」となっている。「安穏廟」は、従来のものとは違うとはいえ墓標があるために一見して墓地ということがわかる。それに比べ、「桜葬」は墓標を刻むプレートが設置されているものの、一見して墓地と判断することはできないような外観になっている。なお、「桜葬」の傍にはペット用の墓地があり、こちらも草木に囲まれている。

妙瑞寺は統合の対象になっていた時期もあったとのことで、時代の変化にさらされている寺の一つの姿ということになるだろう。妙瑞寺は1659年に始まる古い寺で、世代をこえた付き合いのある人々がいるが、一方で最近になって新しく移り住んできた人々が多い地域でもある。そのなかで、寺としてのあり方を考え、その文脈で葬送についても新しい価値観を提案している。「これからの葬送を考える会九州」の活動拠点として死の迎え方

や葬送のあり方について発信している背景には、このような寺による自己自身のあり方の再解釈ということがある。

2.精神障害者支援（8/2）

a.就労支援事業

相談支援事業所「空」の松前香里氏のご案内のもと、精神障害者の就労支援事業を行っている農園や果樹園の見学をした。

畑では野菜をはじめ、ビニールハウスではバジルを栽培している。出荷のための野菜の整形なども畑の傍の施設で行っているとのことだった。果樹園ではおよそ40種類のブドウを栽培しており、ブドウ狩りで客を呼び込んでいる。併設された売店ではワインも販売している。栽培方法の関係で土の使用が最小限に抑えられていることや、色鮮やかなブドウが多数身をつけていることから、非常に見た目が洗練されていて美しいことが印象的。説明を受けた限りでは、確かな農業技術を背景に事業が成立していることが窺われた。プランターに入れる土の量なども計算されているようだが、従事しているメンバーがそれを把握せずに土を入れてしまう場合があったそうだ。夏場は日中の熱い時間を避けるために朝早くから作業にあたる。作業は連携を前提とするため、他人と息を合わせて一つのことをする訓練になっている。

多種類のブドウを栽培していることや、新たな品種栽培へのチャレンジなどは、必ずしも安定した運営にはつながらない面もあるように思われる（そもそも果樹園の運営における「安定」とは何かという問題もあるが）。就労支援事業という位置づけと新しいことへのチャレンジのバランスという観点があるかもしれない。つまり、精神障害者の就労支援なのだから新しいことへの挑戦をする必要などないと考えるかどうか。ほかにも、精神障害者の働く場所で新しいことへチャレンジすることの意義は何かなど。

b.当事者研究

上の施設の見学後、「空」にて当事者研究のメンバーと交流した。彼らは農園や果樹園で作業を行っているメンバーでもある。すでに当事者研究として話し合いを重ねており、信頼関係が築かれている様子だった。まず自己紹介から始めて、SCOI（safe community of inquiry）の説明をした。対話の素地は十分整っていると思われるので、これまで重ねてきた研究をより発展させる方向で進めることにした。交流はおよそ1時間ほどだったが、スムーズに話し合うことができた。今後はテーマ設定を中心に連携を保つことになっている。青木が進行役として参加する機会をもつことができれば好ましい。

○その他の継続的活動

- ・ <ケア>を考える会（岡山）

2016年1月23日（第23回）

テーマ：「ケアを語る流儀と作法」

『ケアの宛先』（鷺田清一、徳永進著、雲母書房）をもとにディスカッション。

- ・ 空堀哲学 café

2015年6月28日「アクセサリー」

2015年7月26日「霊」

2015年8月23日「おしゃべり」

2015年9月27日「化粧」